

ほあけぼのちいあ の 「つれづれのまま」

## たわごと 「藤井聡太にノーベル賞をとってもらおう会」

今、将棋界では最も話題フルな天才棋士「藤井聡太」を知らない人はいない。将棋を知らない人にも可也の人に知られている。

因みに、「藤井聡太」は今中学3年生。中学2年14歳2カ月の昨年（'16）10月史上最年少のプロ棋士（新四段）となった。それまでは現在77歳で最年長プロ棋士の加藤一二三（バラエティーでは ひふみん）さんで14歳7カ月のとき、この人「神武以来の天才」と謂われてきた。「藤井聡太」は何と形容したものか！！「記紀以来の天才神の子」とでもしようか。

プロ初戦では何とこの加藤ひふみん九段と史上最年長差対局となりこれを制した。以来公式戦19連勝中（'17-5-25現在）

非公式戦ではあるがあの羽生3冠にもその他A級棋士の佐藤康光九段・深浦康市九段にも勝っている。

この羽生戦をインターネットTVの生中継を始めから終局まで5時間余りも見ていた、序盤桂馬の駒損ながら”歩の無い将棋は負け将棋”を羽生に強要し押し切った。中盤では終盤に備えたしっかりした受けの玉頭八7歩打は最終盤自玉の詰みを消す好手で印象的であった。

彼は卓越した記憶力と構想力を持ち合わせていると思う。

将棋の指し方には、目前の良い手（最善手なら云うことなし）を積み重ねて有利→優勢→勝勢→勝ちにもっていく戦術的な普通の指し方と、ずっと何手も先の勝ちの局面を描いてそこへもっていくように手を進めていく戦略的な高度な指し方がある。多分囲碁も同じと思うし、現役のころそんな風に仕事とか処世を進めて来られた方もおられるかもしれない。

天才藤井はその戦術的と戦略的の両方を卓越した頭脳で組合わせて将棋を指しているのではないかと想像する。大局観の良さと確かさに加え羽生戦の歩打ちにみる受け即ち危機管理もしっかり持ち合せている。大勝ちするのではなく1点差（一手勝ち）を正確に読み切っている感がある。

今中学生の天才児藤井を、どこかの高校や大学では推薦入学でもよいから入って欲しいと待っているかもしれない。

ただ推薦受付を待つという上かの目線ではなく”推薦状はなくでもいいから入ってください”という下からの目線で準備していれば実現するかもしれない。是非ともお願いします！！と。

凡そプロの棋士は理数系に優れているようだ。とくに数学は。

そこで、国かどこかの大学か研究機関や政財界の皆でノーベル賞級の研究プロジェクト「藤井聡太にノーベル賞をとってもらおう会」をつくり彼を招き入れてくれないものか！！！！

きっとやがて世界がアッと驚く将棋棋士でありながらノーベル賞受賞者が誕生するかもしれない。

小才は 二兎を追うも一兎をも獲ず。

中才は 二兎を追って一兎をも獲ず。

大才は 二兎を追って二兎を獲る。

こんな諺も言葉もないが彼は大才以上の超天才だから棋士に加うるに科学者のみならずさらに他の何かを加えて何足かの草鞋（わらじ）を履いてもきっとどれも成就できるのではなかろうか。

「一芸に秀出るもの百般に通ず」という。

その前に先ず水を飲ませて活躍させたい馬（例えが悪くて失礼）を水飲み場へ連れて行くが如く、天才を研究プロジェクトに入ってもらおうプロジェクトを発足させねばならない。先のメンバーの他に棋界・学者・脳科学者・心理学者・等々をメンバーにした「藤井聡太にノーベル賞をとってもらおう準備会」である。

夢物語の戯言ではあるがなんとか叶わぬものであろうか。

この回おしまい。